上映映画解説

1955, 5

国立近代美術館　フィルムライブラリー

No. 36

Der Student von Prag

『プラーグの大学生』鑑賞会について

フィルム・ライブラリーでは、内外古今の優秀映画の収集保存とその活用に努めており、その事業の一部として、歴史的な価値のある芸術性豊かな古典映画を鑑賞し研究する会を開いていますが、今回は特別鑑賞会第一五回として、ドイツのサイレント映画「プラーグの大学生」をとりあげ、毎週二回（日・水曜日の二時）上映します。

「プラーグの大学生」は、一九一三年にもドイツ座の名優パウル・ヴェゲナー主演によって映画化され、日本でも一九一四（大正三）年二月横浜オデオン座で公開されていますが、今回上映するのは、同じ原作から一九二六（大正一五）年に再度映画化された作品で、我が国では一九二八年一月二一日に、新宿武蔵野館と浅草帝国館で封切され、コンラット・ファイトとヴェルナー・クラウスの共演が好評を博しました。

プラーグの大学生　無声一〇巻

ドイツ・ゾーカル映画一九二六年度作品

――スタッフ――

原作……ハンス・ハインツ・エーヴァース
監督……ヘンリク・ガレーン
撮影……ギュンター・クランプ
装置……ヘルマン・ワルム

――キャスト――

学生バルドゥイン……コンラット・ファイト
スカピネルリ……ヴェルナー・クラウス
伯爵……フリッツ・アルベルティ
令嬢マルギット……アグネス・エスターハツィ
花売娘……エリザ・ラ・ポルタ

The Student of Prague

Balduin, a Student ……Conrad Veidt
Scapinelli……Werner Krauss
Countess Margit……Agnes Esterhazy
Her father……Fritz Alberti
Lyduschka ……Elizza La Porta

Story by Hans Heinz Ewers,
Directed by Henrik Galeen,
Photographed by Gunther Krampf,
Setting by Hermann Warm.

この映画の内容について封切当時のキネマ旬報第二八三（一九二八年一月一日）号から引用してみますと略筋――プラーグの大学生バルドゥインは同大学第一の剣道の達人であったが、貧困は常に彼を苦しめてゐた。そして彼は花売娘リデュシュカに慕はれてゐたが彼はそれを顧みやうともしなかった。或日怪しげな金貸スカピネルリが現はれて彼を誘った。そして金を貸さうと申し出た。その一方スカピネルリは妖術を使って伯爵令嬢マルギットが毛猟の一行をバルドゥインの近くへとおびき寄せ、マルギットと彼とを行きあはせた。会った二人は互いに恋を感じた。令嬢と近付きになる為めにバルドゥインは益々金の必要に迫られた。それにつけこんでスカピネルリは、彼に数万の金を与へ、その代償として鏡に映る彼の影を奪ひ去った。それ以来バルドゥインには影が失はれた。しかし令嬢マルギットとの恋は益々芽生えて、彼は幸福に身をひたす事が出来た。しかもその幸福は長く続かなかった。彼から去った影は忽ち現はれて彼を脅かした。のみならず影はマルギットの許婚と彼の代りに決闘してそれを殺した。人々はそれをバルドゥインの所為と思った。が、バルドゥインは人々に己れの無罪を云ひ解く術がなかった。若しそれを云ひ解かうとすれば、彼は己れが悪魔に影を売った事を人々に告白しなければならなかった。そして人々は次第に彼から離れ、彼を鳥る様になった。バルドゥインは斯くして絶望と破滅にその身を堕した。影は愈々彼の行く手の至る所に現はれて彼を呪った。死物狂になったバルドゥインは遂に最後の力をふり絞って己れの影を狙撃した。そして影は再びバルドゥインの許に帰って来た。が、その時はバルドゥインの死ぬ時であった。バルドゥインの影に向って発った弾は自らの胸元を貫いた弾であった。そして彼は再び立帰って来た己れの影に最後の笑を漏らして息をひきとったのであった。（中央映画社輸入）

（引用文の仮名づかいは原文のまま）

「プラーグの大学生」について

清水晶

ハンス・ハインツ・エーヴァース原作の「プラーグの大学生」が今までに何度映画化されているか、正確なところは調べがつかないが、私の知る範囲でも少くとも三本の作品がある。その一つは一九一三年のシュテラン・ライ監督、パウル・ヴェゲナー主演のもので第二は一九二六年のヘンリック・ガーレン監督、コンラット・ファイト　ヴェルナー・クラウス主演のもの第三は一九三六年のアルトゥール・ロビスン監督、アドルフ・ウォールブリック主演のものであり、今回上映されるのは　その顔触れを見てもわかる通り、その中で二番目の一九二六年のものである。

目前の快楽や富と引換えに、影を売渡すというこの映画の筋立ては、我が国にちょうどこれに当てはまる言い伝えがないため、ちょっと理解に困難を感じるかもしれないが、これによく似たものとして、影を売る代りに、浮世の歡楽への誘惑に負けて、悪魔に魂を売る契約書に署名するというファウストの説話は古くからヨーロッパに伝わり、ゲーテのあの畢生の力作となって、ドイツ人の骨の髄までしみこんでいる倫理観を形づくっていることを考えれば、明らかにそのヴァリエイションであるこの物語も、ドイツ人にとっては今更敢て怪しむに足らない主題と言えることになるのであろう。その証拠に「ホフマン物語」の第二話ヴェニスの船唄のくだりでも、これと同様、歌い女との歡楽と引換えに鏡の中の映像を売るという運びが見られたことを記憶しておられる方も多いであろう。これを我々の側から言えば、これこそゲルマン民族独特の神秘的な運命観であり、倫理観であり、後に表現主義を生む抽象性、観念性の母胎とも考えられるわけである。

（フィルム・ライブラリー運営委員）